

「防災・災害対策」

笹森 賢一

SASAMORI Kenichi

人々の笑顔に支えられ
ジャマイカの庭の安全を守る

レゲエ、コーヒー、ウサイン・ボルト選手。ジャマイカといわれて思い浮かぶのは、明るいイメージが多いだろう。しかし、この国は集中豪雨やハリケーンとそれに伴う水害をはじめ、地滑りや倒木など、さまざまな災害に直面している。「カリブ海プレート」の北端に位置しているため、地震のリスクもあります。実際に、1692年と1907年には大きな地震が起きています」と話すのは、同国北部のセント・アン教区で防災分野の協力に全力を注ぐ笹森賢一さんだ。

笹森さんは大学院で社会学を学んだ後、日本赤十字社で働いた。大阪府支部では府内の災害対応業務を担当。救護班要員向け研修の企画・運営や、府内の自治体が行う災害対応訓練への参加などの経験を積んだ。当時は東日本大震災を受けて、日本国内で防災や災

JICA Volunteer Story

PROFILE

愛知県生まれ。名古屋大学大学院で学んだ後、日本赤十字社に入社。血液センターでの勤務や、災害対応業務を担当し、日赤救護班の活動に関わる。2016年10月から青年海外協力隊（防災・災害対策）としてジャマイカで活動中。



災害の多いジャマイカでは、日本と同様、防災教育に力を入れている。地震が起きたときにどうすればいいか、子どもたちに教える笹森さん

「カリブの笑顔を工夫で守る」

日本赤十字社で東日本大震災後の防災対策に関わった笹森賢一さん。
日本と同様に自然災害の多いジャマイカで、防災教育や災害対策の立案に奔走している。



害対策の重要性が広く認知された時期に当たる。「災害対策に多くの資金が割かれ、備蓄食料や蓄電池、特殊車両、ソフトウェアなど、幅広い分野で技術革新が起きていました。日々の業務にも非定型なものが多く、自分で工夫を重ねたことが、防災分野で働く基礎になったと思います」と笹森さんは話す。

当初は日赤の国際事業を通して海外での活動を目指していた笹森さんだが、海外で日本語を使わずに働いたことがなく、自分の力不足を感じたのをきっかけに海外で実務経験を積む機会を探し始めた。そのとき目に入ったのが、青年海外協力隊の募集ポスターだ。「それまでの仕事で手応えを感じていた防災・災害対策分野での活動を目指し、ジャマイカからの派遣要請に応募し、無事採用されました。これまでカリブに行ったことはなかったので、わくわくしたのを覚えています」

任地となったセント・アン教区は、ジャマイカの庭とも呼ばれ、同国でも特に緑が豊かな地域だ。海岸沿いにはクルーズ船も寄港する港湾都市オーチョ・リオスや教区の行政の中心地であるセント・アンズ・ベイなどがある一方、山間部では冷涼な気候を生かしてレタスやキャベツなどの高原野菜を栽培している。「ジャマイカの人たちはいつも明るく冗談を飛ばす、親しみやすい人々です」。笹森さんは、地元の人たちの印象をそう話す。明るい姿勢は、災害に遭ったときも変わらなれないのだという。「今年5月、洪水で床上浸水の被害を受けた地域を訪問した際、人々は浸水した道路に即席の筏を浮かべ、生活物資を積んで運んでいました。そんな状況で、収入作物となるレタスがだめになってしまった農家の方たちも、大変だけどころにかなるさ、とのんびりした口調で答えてくれたのが印象的でした」

データベースやGPS 小さなテクノロジーで長く使う

ジャマイカの国土の6割は石灰岩大地。地下水が長年



a.大雨の後に陥没してしまった道路。ハリケーンの通り道でもあるジャマイカでは、水害は身近な災害だ
b.用水路にかかる石橋の強度を調べる同僚のアルヴィン・クラークさん
c.各地域にある緊急避難場所。笹森さんは、GPSを活用したマップ化で効率的な避難などの実現を目指している
d.倒木のために通れなくなってしまった道路

にわたって地盤にうがつた穴が、排水路としての役割を果たしている。大雨のときには、こうした穴のうち陥没して地上に露出したシンクホール部分から地下に水が流れ込むのだが、この入り口が流木などでふさがれると、周囲の地域が浸水してしまうのだ。こうした災害と隣り合わせのジャマイカでは、救援物資や救助資機材の整備とともに、被害を最小限に抑えるための防災教育や、観光業界と地域行政が一体となった観光客の避難計画の策定などにも力を入れているのが特長だ。一方で、予算が限られていることから、復興といっても被災前の現状回復以上のことができないケースが多いという。そんな中、笹森さんはできるだけコストを抑えて、末永く活用できるデータベースなどを作成している。

今、力を入れているのが、地理情報システム（GIS）を使った防災マップの作成だ。都市以外では日本と違って細かく地番が付けられていないことも多いジャマイカで、災害時に重要となる警察署や病院、避難所などの位置が正確に網羅されたマップを作成するため、JICAの協力でGPS端末を購入。避難所などの緯度・経度を一つ一つ計測し、地図に書き入れた。「教区内で計測が終わっていない避難所はあと4カ所。全て地図に載せ終わったら、道路網と重ね合わせて最短経路を割り出したり、災害発生時の巡回ルートを作ったりできるようになります。各コミュニティの人口なども考慮に入れば、より効率的な防災計画ができあがると思います」

配属先の防災コーディネーター、アルヴィン・クラークさんとは、配属当初は意思疎通が足りず、行き違いもあったという。今は指示の内容をあきらめられるほど細かく確認することで、互いの求めるものをしっかりと理解できるようになったと、笹森さんは話す。赴任時には日本がどんな国か知らない職員もいたジャマイカで、冗談を交えながら信頼関係を築き上げた笹森さん。将来、国際協力のプロとして活動する日を夢見て、今日もジャマイカの庭の安全のために走り回っている。